



よこと館だより



Est.1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

理事長閑話 埋め草 ⑥4 ～静かに生涯を終える難しさ 尊厳死・延命治療 その1～

昔、出典は定かではないのですが、「ローマの貴族は自らの死期を悟ると食べ物を口にせず、静かに逝くことを良しとしていた」と読んだ覚えがありました。その頃、友人との青い議論で「老いと死」、或いは尊厳ある死について論議をした覚えがあります。それから50年以上経ち、先日その友人から問われました。「昔、お前は余命があまりないと分かたら飲まず食わずで静かに死を迎えると言っていたけど、今でもその気持ちは変わらないか？」と。彼は今、胃ろうが必要となった進行性の病と闘っているのです。

私は高齢者福祉を専門としてきました。昭和40年代、老人ホームでしかできない「明るく健康的で豊かな高齢期の生活づくり」をテーマにしていました（今でも変わらないテーマですが）。その頃は利用者もまだまだ70歳代中心の若い高齢者でした。

当時は国民皆年金・皆保険、老人医療費無料化が実現した時代です。貧しくても老いに明るさと夢があったのです。昭和の右肩上がりの時代でした。まだまだ人口は増加し、経済が発展し社会保障を充実させていくという希望がありました。老人ホームの生活もエネルギーがあり、活発でした。その頃私が上梓した本が「輝やけ老人ホーム」（ミネルバ書房 OP 叢書 1983.4）でした。

その「明るい高齢期」のテーマを定めた時に当時のホーム長であった父が、ボソッと「健康的か」とつぶやいたのは、実は将来の超高齢社会における高齢者福祉が重い「介護」の時代となることを見据えていたからだ、今思います。

その後、制度も措置から契約での利用に変わりました。利用者の平均年齢も上がり、ホームの利用は以前の住宅事情、経済的、家族的な理由から、主として「介護」の理由へと変化していきました。利用者の平均年齢も上がり80歳代後半、重介護者が増えています。

福祉の仕事は、人の幸せを願い働く現場です。それは50年たっても変わりはありません。ただし働きの中身は変わりました。高齢者福祉においては「認知症ケア」、そして「看取りのケア」が重要なテーマとなりつつあります。どうやって「逝けるのか?」、「どこで逝けるのか?」という問いかけです。以前は、看取りの場は病院でした。しかし今はご自身が最後まで生活しているところで、静かに「逝きたい」と思う気持ち、よくわかります。自宅でなくても、今生活をしている特養で最期を迎えたいと望まれる方が大部分なのです。

都内の特養の専任医師の石飛幸三先生は実践からの叫び、ご著書で「平穏死」という概念を主張されました。それは老いの終焉のあり様は、自然な死に方が当事者の無言の意思に沿うことだという考え方です。そう、ローマの貴族の尊厳ある死のように。

参考：「平穏死のすすめ」石飛幸三 2010.2 講談社

理事長 橋本正明

事業本部長メッセージ

立川市の地域福祉について、具体的な推進を図るため設置された立川市地域福祉推進委員会にこの6月から参画している。向こう3年間、立川市、立川社協がそれぞれ策定した地域福祉計画について、その進行管理やアドバイス、さらに評価をおこなうことが役割とされる。市内関係機関・団体、学識者、そして一般市民など15名からなる委員会において、9月までは、市の来年度予算にも関係することから、具体的な計画策定を急ぎすすめてきた。

夜の時間帯での会議設定にもかかわらず、毎回の議論は豊富なアイデアと活気にあふれ、我がごととして取り組む姿勢にとっても勇気づけられる。

三十年以上も前のまだ若かりし頃、「コミュニティ・オーガニゼーション」の授業に刺激されて、地域に潜む課題と地域の資源をいかにしてつなげて解決へと導いていったらいいのか、友人らと夜を徹して議論したことがよみがえる。

市役所からの帰り道、ふと当時の自分から、「まだ、志は熱いか?」と問われたような気がして、思わず夜空を仰ぎみる。天頂近く、変わらずに青白く妖しくも確かな光を放つ白鳥座デネブの輝きが何かを語りかけてくるようで、深く心に沁みる夜となりました。

児童事業本部長 石田芳朗



事業本部情報

🍀 児童事業本部 🍀

外出時にはマスク着用、店に入ったらアルコール消毒。帰宅したら手洗い、うがい、外でも内でも三密を避け、ソーシャルディスタンスを取りましょう！何だか味気ないこの新しい生活様式に子どもも大人もだいぶ慣れ、よく守ってくれています。学校も部活動や運動会、文化祭等の開催を工夫しながら、子ども達が活躍できる場を模索しています。10月には社会の規制がより緩和され、人の流れが活発になることを考えるといつ自分が感染者になってもおかしくない状況下です。気を引き締めながら、暑すぎず、寒すぎず、ちょうどよい季節！の秋を、頑張ってきたご褒美に、子どもも大人も少し楽しみたい！と思います。食欲の秋、スポーツの秋、行楽の秋、読書の秋ですから・・・。

コロナ禍で社会の混迷は、経済や就労において益々厳しくなると言われ、高校生の就職や退所した青年達の就労状況が心配になります。そんな時、尊敬する稲盛和夫氏の「どんなときでも、未来は明るくて、さんさんと太陽が光り輝いて、花畑になっていると思いなさい」の言葉に出会いました。こんな時代だからこそ、内向きにならず大きな目標を持ち、未来を信じて努力することを忘れずにいたいと強く思いました。（至誠大空の家 施設長 国分美希）

🍁 保育事業本部 🍁

新元号を発表した方が、事の成り行きのように首相となりました。パンケーキなど甘いものが好物、ナンバー2の仕事が得意とするところが共感できます。当園の状況は新生活様式に入り、大きな変化はありません。新内閣も旧態依然の体制に見えますが、短期に大きな混乱なく収めたのは評価されるのではないのでしょうか。医療、福祉の現場では備えきれない事態に多くの方がモヤモヤと焦燥感に駆られています。次の対応に過度な期待を寄せてしまいます。

国にはワクチン等の薬品について速断と整理が求められますが、早手回し過ぎるとやらせや仕込み、裏があるようにいぶかれます。出来すぎたシナリオは「ラプラスの魔、人生脚本」（物事が初めから決まっていってあらがえない考え）のように嫌気すら誘いますが、世論ばかりに左右されず、現在の最善、合理性や透明性の証明とのバランスが良いところで納得されていくのが良いのではないのでしょうか。

新生活様式、常識や文化、“ふつう”はさらに刷新されていく予感がします。相手をおもんばかった“忖度”も否定的な意として定着したように思いますが、新常識を見定める力は“流れ”任せにならないように備えていきたいと思えます。（至誠いしだ保育園 園長 高橋智宏）

🍁 高齢事業本部至誠ホーム 🍁

敬老の日にちなんだ「長寿を祝う会」。至誠ホーム恒例の大切な行事です。例年であれば、入居施設では、ご家族もお招きして賑やかに祝膳を囲むところです。しかし、今年度は止む無くご家族やボランティアの参加はご遠慮頂き、入居者と職員のみのお会となりました。それゆえ、各施設それぞれに工夫を凝らしてお祝いをしました。

キートスでは、特養のユニットごとに催す祝膳・お祝いの会の中で紹介すべく、入居者のご家族からのお祝いのメッセージを募ったところ、ほぼ全てのご家族からメッセージを届けて頂きました。直接対面では言いにくいような「私の世界一すてきな母さんへ」という語り掛けがあるなど手紙ならではの、またこのコロナ禍で面会もままならない中ゆえの、想いの詰まったメッセージがたくさんありました。ご自身に宛てられたお手紙が読み上げられると感涙にむせぶ入居者の姿が各ユニットで見られました。体はその場になくとも、このような形でご家族にご参加頂き、入居者と心を通わせて頂ける機会を設けることができたことは、面会を制限せざるを得ない立場としては少々救われる思いでした。

コロナ禍はまだ続きそうですが、皆で知恵を出し合って、工夫しながら「新しい日常」における事業運営を行っていききたいと思えます。（至誠ホームキートス 園長 大友正樹）

本部事務局だより

9月号にアメリカ大統領選挙について書いた後、この1ヶ月で日本の首相が交代した。政治の世界では「一寸先は闇」と言われるそうだが、まさしく晴天の霹靂である。日本の場合、議院内閣制なので直接的に首相を選ぶわけではないので、参画意識が薄い。これが政治への無関心を助長しているのかもしれない。株式等のマーケットは首相交代でも安定しており、アメリカの大統領選挙とは大きく異なる。世界の投資家は、アメリカの大統領選挙の先行き不透明さに嫌気して、円買いや日本株買いへ動き、日本ではコロナ禍で企業業績が悪いのに株高が続いている。この間、米国の著名な投資家であるウォーレン・バフェット氏が、日本の総合商社5社に投資していることを明らかにした。商社という日本独特の中間マージンで儲けている会社がネット社会の中で将来性があると見込んだのだろうか？否である。将来性よりも首相が交代しても安定していて安全で割安な株に投資したと言えるだろう。外からの評価とは中には判らないものである。（法人事務局長 野島 忠幸）